

編集後記

第41号をお届けします。今年号は3篇の掲載となりました。論文数は些少なながら、内容の質の高さといい、確かな論証といい、十分に発刊するに足るものとなりました。会員諸氏と投稿者に感謝申します。今後も、奮ってご投稿くださいますようお願いいたします。学会大会をはじめ、地道に活動を下支えしていただいています会員の皆様方に深く感謝申し上げます。

今年号は、副題にありますように、「福永信哲岡山大学教授のご退任記念号」として刊行しました。福永先生は、岡山大学教育学部において永きにわたりまして、英文学の教鞭をとられ、優れた英語教員の養成に尽力されるとともに、ご自身の専門である19世紀イギリス小説の研究に多大の貢献をなされました。とくに、ライフワークともいえるジョージ・エリオット研究では、第一人者としての名望も高く、今年号にも論文を寄せられ、先生の重厚にして堅実な研究成果の一端を発表されています。文学とは人間がその一生を賭けるに値するものであれば、先生のこれからも変わらぬご研鑽を祈念するものであります。

また、本岡山英文学会の会長の重責を果たされてきましたことも、周知のことと思います。先生の研究者としての凛とした姿勢に加えて、その誠実で真摯なお人柄によりまして、本会の揺るぎない運営と取りまとめを円滑に行うことができたことを、深く感謝せざるをえません。そのうえ、先生には今後とも、厳しい運営状況にあります岡山英文学会の会長職にとどまっていただけは、会員一同、このうえない幸甚といたすものであります。

福永先生は、また大学における英語教育にも並々ならぬご理解とご見識があり、英文学会活動の一環として大学英語の研究を位置づけることにご尽力されました。かつて大学院文学研究科の英語学・英米文学専攻を修了する者は、英文学研究もさることながら、大学英語教育の一翼をになう義務と責任があることを教示されて、大学教員になってきました。日本の大学における英語教育は、国策に貢献する人材育成に不可欠な、重大な責務もまたになうものであるだけに、今日のように、大学における英語教育の意味が大きく問われる時代では、英文学研究者が職務の一環である大学英語教育を自覚的に取り上げることは、非常に意義深いことであります。その意味におきまして、福永先生の本学会における存在意義は大きく、研究者としてはいうまでもなく、会長としても、今後ともご活躍を希望するものであります。

2014年8月吉日 編集委員長